

妄牛西遊記

alea_jacta_est

設定の説明

キャスト 悟空：坂口さん

沙悟浄：川端さん

猪八戒：T - 岡田

三蔵法師：一生さん

偽三蔵法師：伊藤くん

偽悟空：宮崎さん

偽沙悟浄：駿太くん

偽猪八戒：三ツ俣くん

牛魔王：デホ

釈迦如来：森脇監督

基本的には「悟浄歎異一沙門悟浄の手記一」中島敦著 を
ベースにしたパロディです。冗談とノリと勢いで書いています。
ので、基本は沙悟浄（川端さん）視点です。

野球の知識が乏しく、かつオリックスの1ファンの視点で
書かれているため、事実と著しく異なる点や妄想があります。
ご注意ください。

あくまでも、遊びでしているものとしてとらえて楽しんで
頂きますよう お願い致します。

昼食をすませて寝ている師父の横に、腰を下ろす。何事もない天竺への旅などあり得るはずもなかったが、これほどまでに性質の違った4人での旅は一生法師もお疲れになるだろう。

途中、師父の知り合いである若い竜に出会ったが、そこでも師父は聞き役を務めておられた。

一方的に身振り手振りで話している様子がかがいが知れたが、その勢いに押されて用事を済ませる時間が短くなったことに、彼が気がつく様子もなかった。

（師父は優しすぎるところがあるから、俺がたまに守らねば！）

そんな思いを新たにすることもあり、今日も師父の隣を死守しようとしたが、そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、昼食の時にも悟空は師父にじゃれついていた。

「……甘えさせすぎじゃないですか？」

「え？なんのこと？」

散々甘えられて、話を聞かされ、周囲を見守ってきた一生法師にとっては悟空の甘えなど大したことではなかったらしい。

その悟空も今は眠りを邪魔することなく、少し離れた場所で八戒と共に変化の術の練習をしている。

「ええか？ここでこうやったら変身できんねん。やってみろ！」

と悟空が言うと、まだ昼食を食べ足りなかった八戒は、ただ頷くだけの返事を返す。

「本気で思ったらええねん、そうやな……めっちゃかわいい子が居て、たまたまお前のことを見てる、と本気で思うねん。他の雑念は捨てる。いいか、本気でやぞ！」

そもそも女の子が見てるから頑張る、ということ自体が雑念の塊なんじゃないかと疑念を抱きながらも眺めていると、八戒は真剣な表情で悟空の話を聞いている。

「よし！」と、手を一度叩くと、両手で印を結び再挑戦する。

八戒が無様な変身を遂げると、悟空の突っ込みがすぐさま飛んでくる。竜に変身するために頑張っているらしいが、そもそも何で竜にしたのかが分からない。

（竜になったらドラゴンズになるんじゃないのか……？もしかしてこの間の若竜が羨ましかったとか？）

そんな疑問もよそに八戒がまた変化をしたが、どう考えてもぬいぐるみとしか思えない質感と、ふわふわの毛足。茶色い手足まで付いているところを見ると、めっちゃかわいい。の表現に引きずられて別の方向に思考が分散しているようだ。

しかも腹の部分が、どう考えても弾力に富み過ぎている。

「もっとかっこよく！」

そばで見ていた俺は思わず心の中で突っ込む。

（かっこよく変身する。の前に竜じゃなかっただろ、今の）

ごまかしてはいたが、どう考えても竜というよりかはテディベアになった。といった感じで、恐ろしさに欠ける。

かっこよさよりも先に追求することがある気がした。しかし悟空の本気かどうか分からないくらいの突っ込みと、あまりに真剣に話を聞く八戒の様子に、黙って様子を見ていた。

「なんでやねん！もっとこう、強そうな感じにやな」

真面目な顔をして怒鳴る悟空にぶつぶつと八戒が口ごもりながら反論する。

「出来るならやってるよ、ダメなんだ、俺。………どうしてかな？」

もう一度変化したけれども、テディベアに磨きがかかっただけで竜には程遠く、こみ上げてきた笑いをこらえるのに必死だった。

「お前はメンタル弱すぎんねん！ほんまに頑張ってるんか？」

「頑張ってるよ……結果論やん。できへんのは」

「結果だけで物を言われるのが嫌やったら、それなりの結果出したらええだけの話やろ。

っていうか、この世界、結果が全てやで」

悟空の言葉にがっくりと肩を落としている八戒を、いつのまにか目を覚ました師父が温かく見守っていた。

牛魔王との戦い

悟空は確かに天才だと思う。今まで、共に旅してきてそれはよく分かった。そして女好きで、ちょっとチャラい容姿だけれども本当はまっすぐで周りに気を使う男だと言うことも。そして本当にチャラい部分が多いことも、よく分かっている。

（って、褒めてないな、結局は）
実力があることもよく理解はしているのだ。一月ほど前、俺たちが翠雲山中で牛魔王と戦った時の姿は、今でも記憶に新しい。

牛魔王との戦い。それは本来であれば八戒と牛魔王の戦いのハズだった。
怖気づいた八戒をたきつけるように、悟空が後ろから小突く。

「四番を争うのはお前やねんから、ちゃんと戦えよ」
と悟空に言われた八戒は、牛魔王の戦いぶりを前に、自らの実力を振り返って、やっぱりあの人はすごいと素直に感動していた。
「いつか四番に戻れたらいいなって思ってるけど、牛魔王の方が強いねんもん」

そんな彼の言葉にあきれつつも、その通りだと思った俺たちは素直に身をひいた。それほどまでに牛魔王の実績と能力は目を見張るものがあつた。
「凄いですね、一生法師さま」
「……うん」

八戒よりも一回りも二回りも大きい牛魔王の実力を素直に凄いと思うと同時に、やはり師父の顔の小ささと足の長さに感嘆していた事は心の中に止めておく。

そして、牛魔王の手下たちとの戦いで一番、強く早く美しい動きを見せたのも悟空だった。難しい技巧が求められる動きにこそ、悟空の美しさが活きる。その事も思い知った。いつでも華のある部分は悟空が持っていく。
彼には天性のものがある。何者にも負けない、華があるのだ。
そんな悟空が一度だけ、恐い思いをした事があると言う。詳しくは語ってくれなかったが、釈迦如来の手のひらの上で遊んでいただけだった。と
呟いていた事があつた。

顔を見た事はあっても、直接に関わることの少ないお釈迦様に、悟空が何を言われたのか、どんなことがあつたのか。
結局、直接的には分からないままだが、それほどまでに衝撃的なことがあつたのだろうという想像だけは出来た。

一生法師は本当に不思議な方である。優しい。驚くほど優しい。道で若竜と出会えばすぐに掴まってしまう。優しいと言うより、自己防衛の本能がないのだ。この優しすぎる一生法師に、我々三人が同じように惹かれているさまは、いったいどういうわけだろう？

（こんなことを考えるのは俺だけだ。ぐっちもT-岡田もただなんとなく師父の優しさに甘えているだけなのだから）

俺が思うに、我々は師父のあの優しさの中に見られるある悲劇的なものに惹かれるかれるのではないか。

これこそ、我々には絶対にないところのものなのだから。

一生法師は、チームメイトの中における自分の（あるいは人間の、あるいは共に闘うものとしての）位置を、お互いライバルだという争いの哀れさと協力し合うことの貴さとをハッキリ悟っておられる。

しかも、その悲劇性に堪えてなお、正しく美しいものを勇敢に求めていかれる。確かにこれだ、我々になくて師にあるものは。なるほど、我々は師よりも腕力がある。足も短い。顔も大きい。多少の技も心得ている。

しかし、いったんレギュラーの位置の悲劇性を悟ったが最後、金輪際、正しく美しい生活を真面目に続けていくことができないに違いない。

あの優しい師父の中にある、この貴い強さには、まったく驚嘆のほかはない。内なる貴さが外の弱さに包まれているところに、師父の魅力があるのだと、俺は考える。

まったく、悟空のあのずうずうしいまでの実行的な天才に比べて、一生法師は、とことん優し過ぎる。

だが、これは二人のキャラクターが違うのだから問題にはならないのだろう。外面的な困難にぶつかったとき、師父は、それを切抜ける道を外に求めずして、内に求める。つまり自分の心をそれに耐えうるように構えるのである。直面したその時に慌てて構えなくても、外的な原因によって内なるものが動揺を受けないように、普段から構えができてしまっている。

いつどこで甘えてこられても、なお平常心でありうる心を、師は既に作り上げておられる。

だから、外に途を求める必要がないのだ。我々から見ると危なくてしかたのない肉体上の無防備も、つまりは、師の精神にとって別にたいした影響はないのである。

悟空のほうは、見た眼にはすこぶる鮮やかだが、しかし彼の天才をもってしてもなお打開できないような事態が世には存在するかもしれぬ。しかし、師の場合にはその心配はない。師にとっては、何も打開する必要がないのだから。

（一部、そのまま利用しているところがあります。）

